様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月　 ６ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2019
課題番号：１８Ｋ１２９９１

研究課題名（和文）児童福祉施設等における行動評価支援ツールによる支援のPDCAサイクルの確立

研究課題名（英文）Establishment of PDCA Cycle of Supports by Behavior Evaluating Support Tool in Child Welfare Facilities

研究代表者
佐々木　銀河（Sasaki, Ginga）

筑波大学・人間系・准教授

研究者番号：８０７６８９４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では児童福祉施設の職員を対象に、記録・分析作業に費やす時間や負担感を低減しながら、外部支援者なしで職員の支援行動の適切な実行および利用者の支援目標の達成を促進するか検討した。まず、行動評価支援ツールの基本的なユーザーインターフェースの開発を行った。その後、児童発達支援事業所の職員５名と利用者３名を対象に、紙媒体による記録と行動評価支援ツールによる記録で、職員の記録・分析にかかる時間や負担感にどのような差異が生じるかを比較した。その結果、行動評価支援ツールを用いた記録条件において、紙媒体での記録条件よりも記録時間が短くなったことが実証された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
職員による支援のPDCAサイクルを適切に循環させるためには、ケース記録など利用者の目標達成状況を評価する業務を円滑かつ効果的に行うことが非常に重要であるものの、児童福祉施設に関する研究では記録に焦点を当てた研究は行われていない。本研究では、職員が記録を簡便に行うためのツール開発や実証した。
また、開発されたツールは多様な形態の事業所でも活用できる可能性があり、福祉・教育関連施設での職員マネジメントに役立つツールとして社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study examined whether reduce the time and burden of recording and analysis work, and promote the appropriate implementation of staff supportive behaviors and the achievement of user support goals without external assistance for staff in child welfare institutions. First, the basic user interface of the behavior evaluation support tool was developed. Then, five staff members and three users of the child development support center were compared between paper-based recording and behavior evaluation support tool recording to assess that type of recording will make a difference in the time and burden of recording and analysis for staff. The results showed that in the recording condition using the behavioral evaluation support tool, the recording time was shorter than in the paper-based recording condition.

研究分野：社会福祉学

キーワード：児童福祉施設　PDCAサイクル　行動評価

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

児童福祉施設職員においては、支援計画の立案（Plan）、実行（Do）、評価（Check）、改善（Act）という PDCA サイクルを継続して実施することが利用者への支援の基本として示されている。しかしながら、現在の児童福祉施設職員においては、このPDCAサイクルの中でも評価（Check）と改善（Act）が不十分であると指摘されている（井手添，2010）。その理由として、研究代表者が児童福祉施設職員を対象に全国調査を行ったところ、評価業務に相当するケース記録が各職員の主観に依存するため、改善業務に相当するケース会議で評価資料が十分に活用できないことが原因であると指摘した。つまり、職員による支援の PDCA サイクルを適切に循環させるためには、ケース記録など利用者の目標達成状況を評価する業務を円滑かつ効果的に行うことが非常に重要であるものの（森本・野澤，2009）、児童福祉施設に関する研究では記録に焦点を当てた研究は行われていない。

そこで研究代表者は自身の博士論文の研究として、児童養護施設職員を対象に Microsoft Office Excel による行動記録の自動フィードバックツールを用いて、施設外の外部支援者がいなくても職員自身が支援計画を立案・実施・評価・改善できるシステムを開発し、その有効性を検証した。しかしながら、研究代表者が先行研究で用いたツールは以下の４点の課題があり、更なる研究の必要性がある。

１）行動記録ツールの使用にあたり、外部支援者による定期的なメンテナンスが必要であり、職員が自立して操作することが困難であった

２）利用者の目標達成には、職員の支援行動の実行が不可欠であるが、行動記録ツールにおいて職員の支援行動の実行は評価対象外であった

３）操作方法に慣れない職員においては筆記記録よりも記録の負担を感じる場合も少なくなく、職員の記録に費やす時間や負担感の低減が課題であった

４）利用者への支援の PDCA サイクルの確立は、児童養護施設以外の福祉施設においても共通する課題であり、多様な業態の児童福祉施設等における実証が必要である

２．研究の目的

本研究の目的は、研究代表者が先行研究で使用した行動記録ツールを発展させた「行動評価支援ツール」を開発・実装し、多様な児童福祉施設等の職員における記録・分析作業に費やす時間や負担感を低減しながら、外部支援者なしで職員の支援行動の適切な実行および利用者の支援目標の達成を促進するか明らかにすることである。

３．研究の方法

本研究では「行動評価支援ツール」の開発・改修フェイズと実証フェイズに分けて実施した。

【開発・改修フェイズ】

開発・改修フェイズでは 2018 年度に「行動評価支援ツール（ポジティブカルテ：ぽじかる）」の基本的なユーザーインターフェース（UI）の開発を行った。これにより、ボタン形式で職員が簡便に記録をすることができるようになった。その後、下記の実証フェイズに移行した。実証フェイズでの検証結果に基づき、改修点をリストアップして、2019 年度に改修行った。改修後の「ぽじかる」の画面は図１の通りである。

図１　「ぽじかる」の画面

【実証フェイズ】

児童発達支援事業所１ヶ所における職員５名と利用者３名（A さん～C さん）を対象に、紙媒体による記録と「ぽじかる」による記録で、職員の記録・分析にかかる時間や負担感にどのような差異が生じるか比較した。ベースライン（紙媒体での記録条件）と介入（アプリでの記録条件）を交互に２回入れ替える研究デザイン（ABAB デザイン）を用いた。各利用者の行動目標について記録開始から完了までの記録時間をストップウォッチにより算出した。各利用者の目標は、身辺自立、問題行動が職員により選定された。

４．研究成果

実証フェイズの結果を図２に示す。図２に示す通り、介入（アプリでの記録条件）において、ベースライン（紙媒体での記録条件）と比べて、記録時間が短くなったことが実証された。

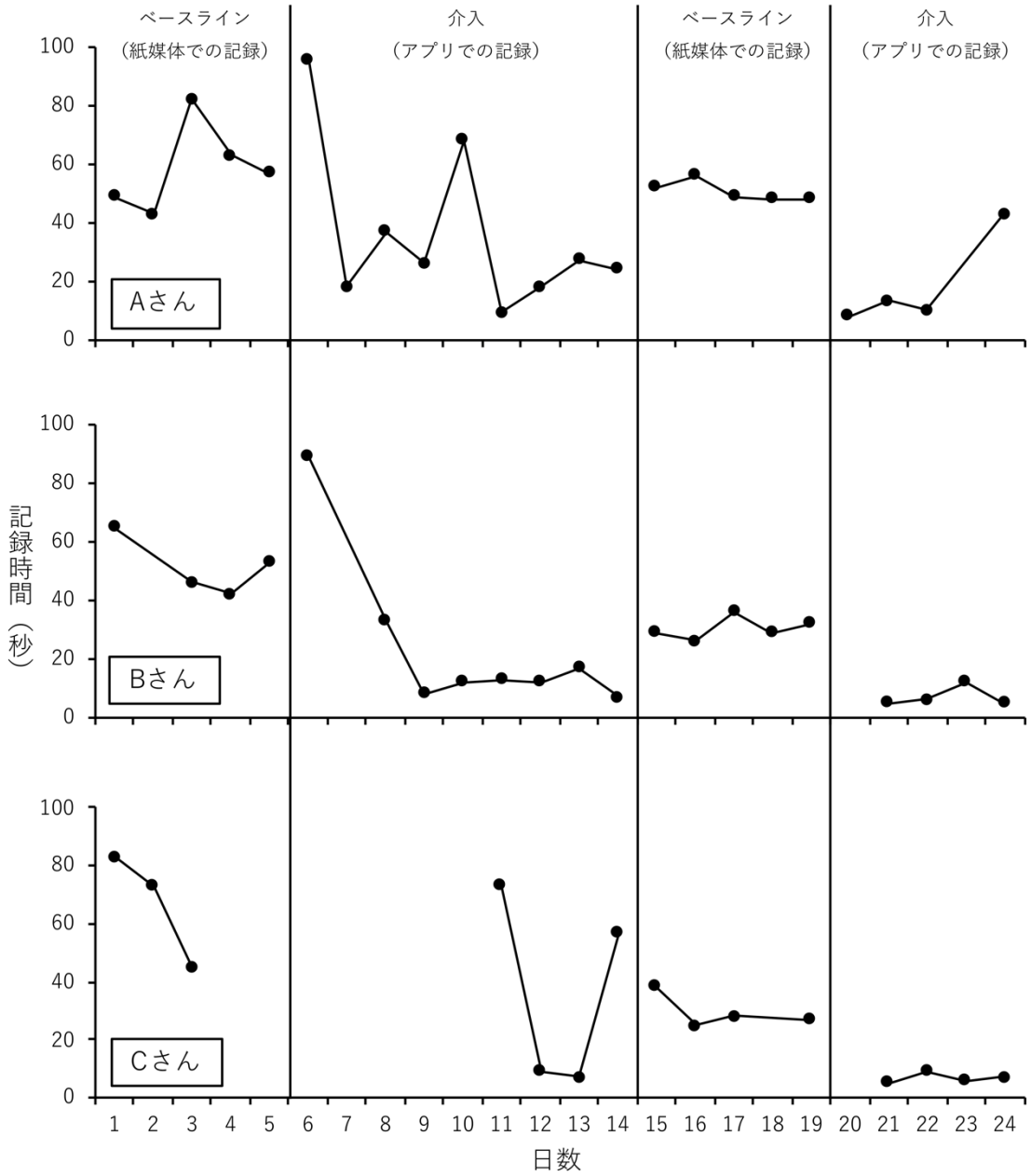

図２　実証フェイズにおける各利用者の目標に関する記録時間の推移

上記の研究成果について 2019 年度に行われた日本行動分析学会第 37 回大会において発表し、若手研究者優秀発表賞を受賞した。本研究の実施により、児童福祉施設において簡便に利用者の行動を記録するためのツールが開発された。今後の研究においては、実際の利用者の行動変容に結びつくかを検証するとともに、多様な形態の事業所で適用条件を検討することが必要である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 臼井潤記・佐々木銀河・野呂文行	４．巻 57
２．論文標題 重度知的障害を伴う自閉スペクトラム症幼児に対する選択行動支援：介入方法を示唆するアセスメントの開発	５．発行年 2019年
３．雑誌名 特殊教育学研究	６．最初と最後の頁 25-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.6033/tokkyou.57.25	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 平野礼子・佐々木銀河・野呂文行	４．巻 56
２．論文標題 自閉スペクトラム症幼児における物の名称理解の獲得：音声ー動作ー絵カードの刺激間関係の学習	５．発行年 2018年
３．雑誌名 特殊教育学研究	６．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.6033/tokkyou.56.1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 佐々木銀河
２．発表標題 児童養護施設職員の入所児支援におけるPDCAサイクルの確立：組織行動マネジメントに基づく問題解決スキル促進システムの開発
３．学会等名 日本行動分析学会第37回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐々木銀河
２．発表標題 児童福祉施設における職員の行動マネジメント：行動分析学に基づく職員の既存のノウハウを引き出すシステムづくり
３．学会等名 日本特殊教育学会第57回大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐々木銀河・末富真弓・杉江征・名川勝
２．発表標題 発達障害学生の修学・心理・キャリア相談を通じた自己理解促進ツールの開発ー学生自身の得意・苦手の理解と共有を図るWEBアプリケーションー
３．学会等名 全国高等教育障害学生支援協議会第4回大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

2018年9月：第30回日本特殊教育学会 研究奨励賞 受賞 2018年9月：第15回日本特殊教育学会 実践研究賞 受賞（共著者として） 2019年8月：日本行動分析学会 第3回若手研究者優秀発表賞 受賞

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考